



地域計画運動の原点は“グンゼ”・“郡是”にあり

明治の郡是・町村是運動の現代意義

糸乗 貞喜

(よかネットNO.56 2002.3)

－ 1 地域産業

グンゼと郡是の思い出

「郡是」の原本というモノを初めて見た。次頁の写真がそれである。この実物を見るまでに二十年以上たった。

「グンゼ」という会社がある。婦人用のストッキングや肌着を製造している会社である。これが「郡是」という漢字で書くことを知っている人は少ない。

私の故郷では、私が小学生だった頃は「郡是製絲株式会社」と言っていた。そして女性の就業先としても、農村の重要産業であった養蚕の繭の納入先としても重要な位置を占めていた。私の家も蚕を飼っていたし、集繭場にもなっていて「郡是製絲株式会社」と墨で書かれた、大きい木の看板があったように思う。さらにつけ加えると、小学生の「遠足」が「社会見学」というものになった頃（昭和21年）から、郡是製糸は工場見学先になっていた。ただ、遠足も兼ねていたため10km余の道のりを歩かねばならなかった。

この郡是という変な社名が、国是、町是、村是などというときの「是 = 基本の方針」という意味だと知ったのは、1975年頃だったと思う。その後出張の寄り道をして、京都府綾部市のグンゼ株式会社を訪ねた。印象に残っていることは、対応してくれた総務担当者の「うちは、総務担当者にとって大変な会社なんですよ。本社を東京に動かせないもんですから、何かと不便です。また株主総会も大変なんです。生い立ちからして小株主がやたら多いもんですから」と言ってぼやいた。それを聞きながら「なるほど、なるほど、ちょっといい話だなー」と思っていた。

インターネットで検索してみたが、「本社 = 京都府綾部市、大阪本社 = 大阪市北区、東京支社 = 東京都中央区」となっている。念のため、グンゼの企業理念の一部を引用しておく。「当社は明治29年8月、何鹿郡（いかるがぐん、現・京都府綾

部市）の地場産業である蚕糸業を振興することを会社設立の趣旨として、創業者・波多野鶴吉によって設立されました。社名もこの趣旨を反映させて“郡の方針”を意味する「郡是」と定め、地域社会と共存共栄をめざす会社として郡是製絲株式会社（現・グンゼ株式会社）はスタートいたしました……」となっている。

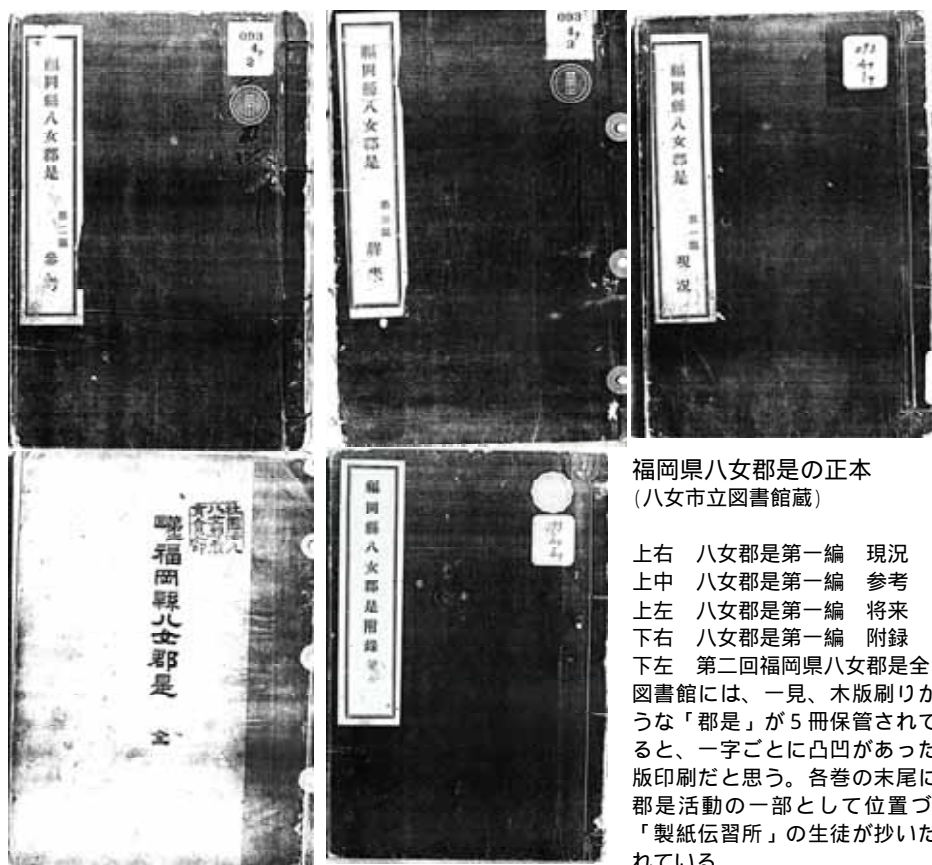
地域興しのための、一株株主によるベンチャー企業

綾部のグンゼに行ったとき、創業者の「波多野翁講演集」をコピーさせていただいた。この中の会社設立の目論見書に、＜農家の一戸当たりの繭所得を二倍にし、養蚕農家数を一倍半にするための設備を整えること＞のために、「会社の性質は、株式会社なるが故に個より株主の利益を重んずべきは当然のことなるも、設立の趣旨は専ら蚕業奨励の機関たるにあるを以て、特に此の精神により経営すること」とされている。

波多野の思いは、郡内の圧倒的多数を占める百姓の所得向上にあったのである。資本金は9万8千円と定め、養蚕家が出しやすいように一株を20円としている。第1回の払い込みは、その1/4の5円、それも3回分割にしている。まさに大衆的ベンチャー企業起こしであった。

明治30年の株主は721人で、その60%が1～2株であった。結局、この会社は地域の養蚕と蚕糸業の振興機関であり、共同体のセンターのような性格を持っていた。一応、20円とか5円とかが現在価格でいくらぐらいかを見るために「値段の明治・大正・昭和風俗史」で巡査と教員の初任給を見ると、明治24年・30年で8円程度となっている。現在の初任給が30万円だとしても、当時の農家はまだ自給自足経済だったので、現金の重みははるかに大きかったと思う。

ついでに同書からもう少し引用すると、借家は38銭（明治25年）、そば1銭（同20年）、駅弁10銭



福岡県八女郡是の正本
(八女市立図書館蔵)

上右 八女郡是第一編 現況
 上中 八女郡是第一編 参考
 上左 八女郡是第一編 将来
 下右 八女郡是第一編 附録
 下左 第二回福岡県八女郡是全
 図書館には、一見、木版刷りかと思わせるような「郡是」が5冊保管されていた。よく見ると、一字ごとに凸凹があったりするので活版印刷だと思う。各巻の末尾に、この用紙は郡是活動の一部として位置づけられていた「製紙伝習所」の生徒が抄いたものだと書かれている。

(同20年)、京都市電2銭(同28年)などだが、借家だと今の価格では10万倍ぐらいの差になっている。

当時の人たちは、地域産業興しのために、現在価格でおおよそ50~200万円ぐらいの株を買ったと見てよいと思う。創業当初の払込資本は25,000円で、出した人は168人だった。こんな会社が20年後の第一次世界大戦で株価大暴落の折には、銀行が倒産するのを見て「郡是なら安心なのでお金を預かってほしい」という者までいたということである。現在の日本の状況と重ねて考えても面白い。

八女郡是と田中慶介郡長

綾部のグンゼに行った頃から、いろいろな資料によって、八女市にはグンゼの正本が残っていることは知っていた。以前も八女市役所でお願ひしたこともあったが、実物を見たのは今年の一月である。八女郡是を一見して、プランナーの先達のすごさに圧倒された。

田中慶介郡長は非常に優れた人だったようで、郡是に先立って、県下の沿海漁村を実地踏査して「福岡県漁業誌」(漁業の実態及び計画書)をまとめている。その漁業誌が東京・上野で開催され

た水産博覧会に出品されて、前田正名に認められ農商務省に引き抜かれる。田中慶介が編纂した八女郡是はよく系統立っている。

明治32~33年に印刷された八女郡是は、第一編現況(現在の事実)、第二編参考(既往現在の事理)、第三編将来(現況と参考とを基礎として将来の計画施設を決定せしもの)、第四編付録とあり、第二回八女郡是は明治44年に再度策定されている。目次だけでも引用したいが、膨大になるので、第一編の序を少し引用する。

「郡是ナルモノハ何カ為メニシテ作レルヤ其非ナルモノヲ去テ其是ナルモノヲ取り之ヲ事業ニ挙テ之ヲ行ハンカ為メニシテ作レルナリ.....」つまり非なるものを取り去り、是なるものを挙げて事業化する、といている。序の終わりには「之ヲ箱底ニ蔵メテ虫鼠ノ食ト為サシムルコト勿レ.....読者其意ノ在ル所ヲ察シテ之ヲ實際ニ施サハ則チ未タ必スシモ小補ナクンハアラス是ヲ序トス」つまり箱にしまっておいて、虫や鼠に食わせるのではなく、実行して下さい、と言っている。

八女の特産品の原点は八女郡是?

八女地域には特産品が多い。そのルーツは八女郡是にあるということは知らなかった。今回郡是



郡是のそれぞれの巻末に付された「この印刷用紙は製紙伝習所の生徒が作ったもの」という文章



顕彰碑の右側に、富岡鉄斎の書いた前田正名全国行脚の姿



京都知恩院にある前田正名の顕彰碑

を丹念に見ていくと、日頃言われている八女の地場産業や特産品が全部出てくる。手漉き和紙、福島仏壇、八女茶、八女提灯、石灯籠、絣などは、以前からあった産業ではあるが、郡是によって一層発展させられている。

私の実感でいうと、郡是が取り挙げた範囲は極めて広く、地域全体が「どう生きるか」に応えよ

うとしている。最近の地域総合計画は、行政計画的要素が強いように思う。極端な場合には、国から交付される予算（交付税や補助金など）で役所が行う行政事業の予定表のような考え方の計画もある。

ところが八女郡是は、上にあげたように郡内の産業はもとより、住民組織を含めて、民間の事業を重視し、「何とかして地域を豊かにしよう」という心意気を感じられる。さらに言うと、時間も予算もかけている。そのことを次に示す。

明治31年3月9日 町村是調書着手の議の訓令
31年度内に完成するよう指示
町村是調査費 2593円2銭6厘（郡費補助1500円）

明治32年3月 第一回八女郡是調査委員会開催(委員13名)、同年10月2日調査完了

八女郡是調査費 1390円95銭7厘

八女郡是の発行 第一編 現況 明治32年11月
第二編 参考 " 32年11月
第三編 将来 " 32年11月
付録 " 33年4月

第二回八女郡是 全 " 44年3月25日

なお、郡町村是の印刷用紙は、明治31年に設置され「製紙伝習所」生徒の試製和紙が用いられている。

郡是・町村是による産業育成は、近年行われている「工場誘致」のように、地域の成り立ちと関わりのないケースはないようだ。当時はまだ国の力は弱かったので、地域づくりを進めるには、地域の主体性が求められていた。今よりも地域自治の考えが強かった。従って郡是のための現況調査にしても「貸借金比較」「貯蓄」「所得」「生産」はもとより、信用組合などの金融機関、同業組合、試験場、講習所などが計画対象になってい
当時の約4千円という費用は、グンゼ(株)の株式

払い込みの比較に用いたデータで見当をつけると、初任給比較では一億円程度、家賃比較では2億5千万円程度になる。

郡というものが現在のはなじみの薄いものとなっているが、当時は地方自治の重要な機関であった。私はこの仕事（地域づくり計画のコンサルタント）についてから、延喜式に対応した「郡」が、日常環境はもちろん（流域に対応している場合が多い）、通商や婚姻などの社会的圏域にかかわりが強いことに気がついていた。八女郡是にも「郡二自治ノ政事ヲ施行スルハ」というように自治の現実的基礎であったことが印されている。

前田正名のこと

グンゼ株の波多野鶴吉も、八女郡是の田中慶介も、前田正名との出会いによって郡是運動に取り組んでいった。前田正名のことを簡単にふれておく。

正名は嘉永3（1850）年生まれの鹿児島藩士で、1865年に長崎の語学塾にて学び、明治2（1869）年にフランス留学、9年に帰国して内務省勸農局に出仕、11年にはパリ万博事務官長および総領事になっている。14年以後勸業関係の職務にあたり、農商務省の『興業意見』30巻の編集をしている。

その後、山梨県知事、農商務次官などにつくが、明治23年省内の対立の中で辞任して貴族院議員になる。その後、高橋是清などと在野で活動する。全国行脚の中で田中慶介や波多野鶴吉に会っている。その当時の姿を、富岡鉄斎が描いて、その行脚の姿と書が石碑になって京都の知恩院に残っている。（図2、3）

郡是・町村是運動の現代的意義……私の思い

アメリカという国を考えると、200余年の間ずっと物質的豊かさを求めて走り続けてきたように見える。大牧場経営、ゴールドラッシュ、大農業経営、工業改革（テラーシステム、フォードシ

ステム）、サービス業におけるマクドナルド方式（ファーストフード）などなど、現代の豊かさの先導者だった。この意味での役割は大きい。

日本という国の近代は、1600年以降で見の方がよいと思っている。明治以前の300年の近代化の歩みは、60余州・300藩がそれぞれの持ち味を生かす地域経営を行ってきた。明治に行われた郡是・町村是運動も、地域物産重視で進められた点を見ると、その延長とも見られるが、一方では、近代工業の生みの親・育ての親（インキュベーター）の役割をも担っていた。

土地柄商品奨励・近代化によって開発・増産し、その輸出で稼ぎながら、官営による「大量生産型工業」の導入が図られた。明治・大正・昭和の戦前の時代は、これらのいくらかの成功で、アジアにおける工業国になった。ところが指導者は、「これで世界の工業国になった」と錯覚して大戦争をやり、国民を貧困のどん底に追い込んだ。

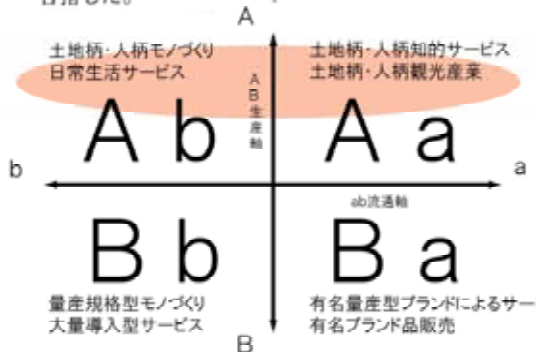
戦後は、敗れた欧米に学んで「規格品大量生産主義」に走り、一時は「世界一豊かな国だ」と威張れるまでになった。戦前の日本は「都市の工業化」であったが、戦後は「日本の総都市化」となり、都市化の条件のない地域は「オチコボレ」としての扱いを受けた。オチコボレは切り捨てられ、農山漁村は過疎化していった。

バブル期の「リゾート」計画などというものは、その農産漁村を都市の外縁部として取り込み、不動産業の「稼ぎの場」として使い捨てにすることだった。いや、本当に、冷静にそういう稼ぎを考えていたのなら、いくらか救われる。ところが、日本中が錯覚に狂奔していたのだからやりきれない。魔女狩り裁判と同じで、それに同調しない正常な人間は、のけ者にされた。日本中が大もうけに走っている中で、その分け前にはあずかれなかった。

幸いにして私は、オチコボレにはありついていた。

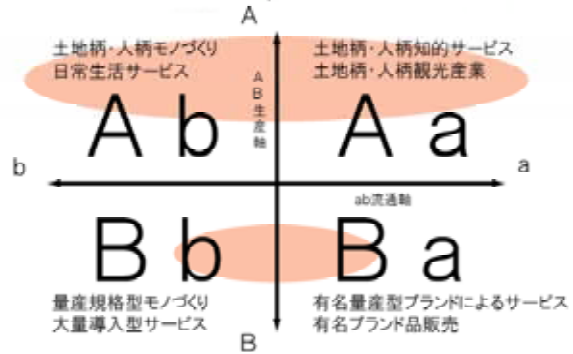
① 17世紀から300年間の産業モデル

300諸藩が土地柄人柄による産業開発で自立経営を目指した。



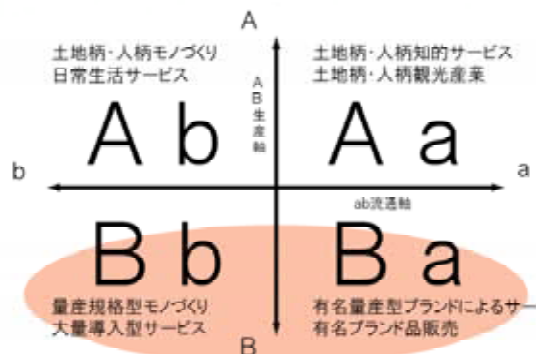
② 明治・大正・昭和の敗戦まで

量産型の工業も取り込んで近代化を図った



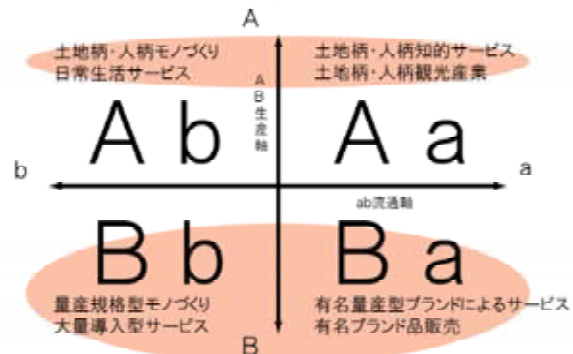
③ 戦後の産業展開

欧米のシステムを導入し、量産型の工業開発で物的に世界一豊かな国造りをした



④ 今後の地域産業の展開

もう一度土地柄、人柄産業を見直して二つのタイプの共存する地域社会を作らなければならない



図表1 地域産業発見産業分類

後には「バブル」という言葉で呼ばれるようになったが、当時の私は「空」だと思ってそれを主張していた。色即是空の空ではなく、単なる「空っぽ」である。このバブルによって、「日本の総都市化」は成功し、今や過疎地にまで都市型の犯罪が持ち込まれている。

バブルは「ハジケタ」といいながらも、バブル以降も「マイナス成長はゆるさん」といって、狂ったままの稼ぎが続くように、無理を重ねてきている。この十年間続けてきた借金による「バブル水準の維持政策」は、膨大なツケを残している。

先の敗戦による荒廃は、ほとんどの国民にとって「ゼロ」からの出発であった。ところが今の日本は、幸いにしてというか、不幸にしてというか、結構、資産も持っている。ということは、資産を持つ層とツケを受け持つ層との間の貧富の差が一層開くということでもある。若い人たちに、途方もない「ツケ」を負わしている。このツケを、い

くらかでも減らす為に、少しトーンダウンした方がよいように思っている。

量産は大成功して、かなり豊かになったのだから、これからは郡是運動に学んで「土地柄・人柄主義」産業を、2～3割程度取り戻した方がよいのではないかと思う。そうでないと環境も人々の心も、ズタズタになってしまうのではないかと心配である。